「カスミソウ」

―初稿―

2023/7/19

雨森 れに

〈人物表〉

有賀（あるが）　光男（みつお）　（８２）　一人暮らしの老人

有賀（あるが）　和樹（かずき）　（６０）　光男とあずさの息子

有賀　あずさ　　光男の妻。７２歳で他界。

〈ログライン〉

認知症を発症した光男が亡き妻の記憶を忘れることに怯え、息子の和樹にすすめられた対策として手紙を書く。

〈ねらい〉

伝えたくても伝えられない。会いたくても会えない。
生きている想い人不在の愛。伝えることの大切さ。

1.

リビング（朝）

ちゃぶ台の上にカスミソウと書かれたメモと花瓶。
中にはかすみ草。花弁がいくつかテーブルに落ちている。
風鈴の音がし、花が揺れ、花弁がまたひとつ落ちる。

2.

光男宅・外観（昼）

蝉の声。小さめの一軒家。門を開ける汗だくの和樹（６０）。片手で仏花を持っている。

3.

リビング（昼）

８畳ほどの和室。壁にはかすみ草のドライフラワーが９束。１列に飾られている。
小さめの仏壇にあずさの写真。
仏壇前に座った光男（８２）が水ようかんを供える。
扇風機にあたる和樹が汗を拭きながら、

和樹　「母さん、水ようかんすきだったっけ」
光男　「あるからやった」
和樹　「まぁ、母さんなら何でも喜ぶかぁ」
光男、おりんを鳴らし、手を合わせる。
和男も汗を拭くのを止めて、手を合わせる。
和樹　「……また外に出るの、やだなぁ」
光男　「行きたくねぇな。俺も死んじまう」
和樹　「俺だって嫌だよ。でも、この時間からしか空けれなかったんだって」
光男、無言で眉をひそめ、ちゃぶ台の上に視線を移す。
ちゃぶ台の上には花瓶に入ったかすみ草。
その隣に新聞にくるまれたままの仏花、水ようかんが置いてある。
和樹　「ほら。行くよ。鍵出して」
光男、ポケットから車の鍵を出して渡す。
和樹は鍵を受け取り、立ち上がる。
和樹　「先行って車冷やしてくる。必要なもの、もってきてよ」

和樹、玄関へ向かう。
光男、戸棚からビニール袋を取り出し、仏花と水ようかんを入れる。

4. 車内（昼）

一般的な4人乗りの車。バックミラーに色あせたピンク色のお守りがぶらさがっている。
和樹が運転し、光男が助手席に座っている。

和樹　「この車さ、だいぶ古いんじゃないの。買い替える？」
光男　「いい。もう免許も返す」
和樹　「そっか。そうだよな。そのほうが俺も安心かも」
光男、無言。
和樹、光男をちらりと見るが、そのまま無言で運転を続ける。

5. 墓場（昼）

砂利道を和樹が歩き、光男が続く。
和樹の手には水桶と紙袋、光男の手にはビニール袋がある。

和樹　「日差しが痛い。今日ほんとに死ぬ人いそうな暑さだわ」
光男　「だから言ったろ。俺が死んだらカズのせいだからな」
和樹　「おやじが死んだら？　それは母さんが連れに来たんだって」
和樹、笑う。
光男は怒ったように鼻を鳴らす。

× × ×

和樹　「あれ。お墓綺麗じゃん」
有賀家の墓の周りには雑草ひとつなく、墓石もほとんど汚れていない。
和樹、自分の持つ紙袋を見る。中身は線香、ライター、雑巾しかない。
和樹　「思い出した。去年も綺麗だったわ」
光男　「……さっさとやって、帰るぞ」
光男、足で墓まわりの砂利を直す。

和樹、光男の様子を見て微笑み、墓を整え始める。

× × ×

光男、和樹が墓に手を合わせる。

光男　「（顔をあげて）帰るか」

和樹　「うん。あ、そうだ。おやじ、カラスにやられるから水ようかん回収して」

光男　「あげたまんまでいいだろ」

和樹　「毎年言ってるけど、今はダメなんだって……」

和樹、何かに気付いた顔をする。

光男はしぶしぶ水ようかんを回収する。

6.

車内（昼）

和樹が運転し、光男は助手席にいる。

和樹　「さっき思ったんだけどさ。母さんってあんこ好きだったよね」

光男　「まぁな」

和樹　「去年もその前も有名なところの和菓子だったなってさ」

光男　「知らん」

光男、ドア窓ガラスの外の景色を見る。

和樹　「命日の前に掃除しといてくれたりさ。おやじってそういうとこあるんだよなぁ」

和樹、お守りをチラ見する。

和樹　「このお守りも母さんがつけたまんまだし」

光男　「外しかたがわからなかっただけだ」

和樹　「……おやじが嫌ならさ。免許返さなくていいよ」

光男、横目で和樹を見る。

光男　「家に着いたら、話がある」

和樹　「わかった」

7.

リビング（夕）

光男と和樹、座って冷たい麦茶を飲む。無言。

扇風機の風で風鈴が鳴る。

和樹　「……話って？」

光男、立ち上がり、戸棚から封筒を取り出す。

光男　「（渡しながら）読め」
　和樹、封筒をあける。紙を引き出すと診断書の文字が見える。
和樹　「アルツハイマー型認知症って……」
光男　「ボケはじめたみたいでな。先週、ガスコンロの付け方が一瞬わからなかった」
　光男、和樹に背を向け、仏壇前に座る。
和樹　「俺だってたまに何かわからなくなることあるし」
光男　「……母さんがな。わからないことできたらすぐ病院行けってよく言ってたんだ」
　光男、線香に火をつける。
光男　「母さんが亡くなって１０年。母さんの好きな食べ物や花には自信があったのにな。この前、何を買えばいいのか……わからなかった」
　和樹、壁のかすみ草を見る。
光男　「古い記憶が残るって言うだろ。昔から母さんにいろいろ買ってあげればよかったな」
　光男の肩が震える。
　和樹、何か言おうとしてやめる。
光男　「わからなくなっていくってのは怖いもんだな」
和樹　「おやじ……」
光男　「今後の事は、また連絡する。カズはもう帰れ」
　和樹、背中を向けたままの光男をあとに部屋から出ていく。
　光男、新しい線香に火をつけ、おりんを鳴らし、手を合わせる。

8.

病院・カウンセリングルーム（朝）

　カウンセラーと対面する光男。居心地が悪そうにしている。
カウンセラー「忘れていく不安っていうのは辛いですよね。一番忘れたくない事ってありますか？」
光男　「いや、とくには……」
カウンセラー「そうですか……もし思いついたら、紙に書いたり、

口に出したりすると忘れにくいことがあります。気分転換になりそうだったら是非」

光男　「はぁ……」

9.　リビング（昼）

光男、ちゃぶ台上のかすみ草を眺める。
メモを手に取り、またかすみ草に視線を戻し、頷く。

和樹　「ただいまー」

和樹が部屋に入ってくる。
光男、目を開き驚く。

光男　「また連絡するって言っただろ。なんで翌日に来るんだ、お前は」

和樹　「今日は有給取ってきた」

光男　「大げさだな」

和樹、レターセットを差し出す。

和樹　「今後の事はまた別で話すとして。今日は一緒に手紙書こうよ」

光男　「なんだそれは」

和樹　「指先動かして、自分の気持ち書くといいんだって。母さんに手紙書こう」

光男　「ば、ばか。この歳でそんなことできるか」

和樹　「誰もラブレター書けって言ってないよ。本当に素直じゃないっていうか、なんていうか」

和樹、レターセットを広げ、光男にペンを差し出す。

光男　「そうやって茶化すところは母さんに似たな」

和樹　「いいからいいから。ほら、書こう」

光男、仕方なさそうにペンを取る。数秒悩み、書き始める。

光男声　「生きているうちは何も言えず、別の世に言ってから伝えることを許してほしい。せめて一度でも愛していると言えたらよかった――」

光男、手を止め、恥ずかしそうに咳払いする。

光男　「手紙って難しいな」

和樹　「自分が思うままに書きなよ」

光男、仏壇のあずさの写真を見て、再度ペンを走らせる。

終わり